

6月4日
定時総会

次号は総会
特集を企画

NPO BEEN通信

特定非営利活動法人 自転車環境創造ネットワーク

2018
初夏号
No24

デンマーク自転車事情

理事長 森山 功

デンマーク国交樹立150周年及び川崎市とオーデンセ市の経済交流調印の一環として結成された川崎市デンマークミッション団の一員に、金子和夫(監事)氏、松木茂夫(会員)氏と私の3人が参加した。これは山田川崎商工会議所会頭、曾禰川崎市振興財団理事長、伊藤前経済労働局長等13名で構成され、昨年(平成29年)10月25日

から11月1日までデンマークを中心に北欧3カ国を親善訪問した。特にデンマーク・オーデンセ市で交流と親睦を深め、コペンハーゲンでは国会や教育施設を表敬訪問。世界有数の風力発電の現場を海上から視察をした。また、自転車王国と評判の高いコペンハーゲンの自転車事情を垣間見ることができた。



金子和夫氏④、松木茂夫氏⑤、筆者⑥(コペンハーゲンにて)

自転車保有率の高い国トップ3はオランダ、ドイツ、デンマークと言われている。私たちが掲げている5K+1S(題字の上に表示参照)の運動観点から見るとわが国よりはるかに進んだ自転車先進国と感嘆せずにはいられないことが多々あった。

① 自転車道の完備 これは歩道、自転車道、車道の完全分離だろう。日本の自転車道は申し訳程度で、狭く、とぎれとぎれに緑の線が車道の端に引かれて自転車道と称されている。これでは危なくてうかうか走れない。自動車を運転をする側から見ても怖い存在である。歩道を走れば、これまた危険で事故の原因になる。さらに日本では車ほど方向性もうるさくなく、自転車は無視して乗っているといっている状態である。自転車道の整備が急務だと痛感した。市民の足として自転車を使い、楽しむというには程遠い自転車道だ。



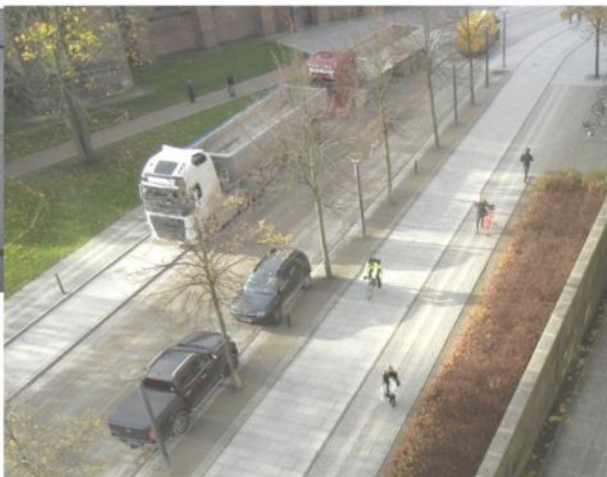
列車には1両は自転車等の優先マークが付いた車両が見受けられ、一目で自転車をそのまま持ち込めることがわかる

② 自転車優先車両 日本でもJRが千葉で自転車優先車両を運用し始めたと報道され、京浜急行でも「京急サイクルトレイン」を運行している。ただ残念なことに観光、サイクリングなどマニアのためのようで一般市民には関係ないようである。デンマークではほとんどの列車に自転車専用車両が

連結されていて、一目でわかり、日常の通勤、買い物などに利用されているのだ。早い話が日本では自転車で駅舎の中のコンコースを通ることも自転車を持ち込むことも禁止されていて、分解し、サイクルバックに収納しなければホームに入れないし、乗せてもくれない。



歩道、自転車道、車道が完全に分離されている④また自転車道が作られて歳月を感じるモザイクのマーク⑤が自転車先進国を物語っている



③ シェアサイクルについては街角、公園に至るまであちこちに設置され市民の足として活用されている。日本でもオリンピックを目指しシェアサイクルのエリアが広がってきていて、都心部ではかなり定着してきたように見えるがまだ北欧のシェアサイクルに追いつくには時間がかかるだろう。私たちも第3の公共交通機関と位置付けて研究をしているがまだまだの感を抱いた。点から点の交通機関から面をカバーできる自転車の活用はもっと国策として考えていかなければならないだろう。

④ 駐輪場の施設は日本では不法駐輪をなくすことを目標に整備が進んできた。日本の駐輪施設のレベルは結構高いのではないかと感じた。これは自分の自転車を車内に持ち込めるから駅前に駐輪場は必要ないとも言えるが、駅前に不法に止めていく人も結構いるように見受けられた。



自転車を楽しむ風潮は北欧に軍配が上がる。それはサイクルショップを覗いてみても分かる。日本では公道では走れないような自転車が多種類陳列されており市民の楽しみの一つになっているようである。プラチナ社会研究センターの鎌形太郎氏は「環境問題等を背景に欧州では都市交通として自転車利用に積極的である。今回訪れたデンマークは人口当たり自転車保有率世界第三位の自転車大国。自転車利用の歴史は古く、第二次世界大戦前より都市交通の中心に自転車があったという。戦後のモータリゼーションの中で、主役の座を一時車に奪われたが、1970年代のオイルショックを契機に自転車は復活。自治体がまず自転車利用に力を入れ、2005年以降は国を挙げて自転車利用促進に取り組むようになった」と述べている。わが国でもやっと国が腰を上げた段階で、太田昭宏前国土交通大臣と森井博氏の対談を見ても、これからの我が法人の果たすべき役割は大きいと思う。



町中に設置されたシェアサイクル、使用方法はハンドルのところかなり詳しく記載されていた



町中のサイクルショップ⑤いろいろなタイプの自転車が陳列されており、見るだけで楽しい。さらに思いつきの自分に適した自転車を作り上げている。写真右⑥は荷物を運ぶ。⑦は子供や大人まで乗せて走れる自転車である(撮影森山)

町中で見たいろいろな自転車



太田昭宏前国土交通大臣と 発行人森井博氏が対談 「パーキングプレス」誌から



「自転車活用推進法の本格運用開始で2018年は重要なターニングポイントに」をテーマに前国土交通大臣の太田昭宏衆議院議員と「自転車・バイク・自動車駐車場パーキングプレス」誌発行人・森井博氏の対談が同紙に掲載された。同誌はこれまで既に「パーキング業界の明日」と題して今回が96人目の対談だそうである。我が法人でもパーキングプレス誌は定期購読しているが、4月10日東京・杉並区の集いで太田議員から「森井博氏と対談したんだ」と話があり、後日1冊贈呈を頂いた。この

業界誌購入のきっかけは東海技研株式会社機器導入時に代表取締役社長中島敦氏に勧められたものである。

対談の中で太田議員は「自転車活用推進計画の閣議決定によって日本の自転車に関する行政は今年、正念場を迎えます。2018年は日本が自転車先進国への道を歩みだした最初の年として歴史に刻まれるよう、皆が努力を重ねなければいけない」と語り、森井さんをはじめ現場で汗をかいてきた関係者の皆さんにエールを送りたいと結ばれている。

■ 第31回 蚕糸の森まつり

「蚕糸の森まつり」が3月25日杉並区・パイパーク東高円寺駐輪場に隣接する蚕糸の森公園と杉並区第十小学校の運動場で開催された。今回でこのイベントに参画するようになって5年を経過、地域区民との融和を目的として、自転車の安全運転の啓蒙とアンケートなどを行ってきた。更にイベントの目玉として自転車2台を景品に提供、ジャンケン大会を開催、これも4年目を迎え好評を博していて、次回からジャンケン大会を“メインステージで”との主催者からお誘いも受けている。また、自転車事故が多発する中で区民の安全確保のために近隣の放置自転車対策啓蒙にも力を注いでいるところである。(平尾)

■ 駐輪場管理施設のリニューアル

代田橋バイク自転車駐輪場

東京都杉並区和泉にある「代田橋バイク自転車駐輪場」を2018年4月16日～4月26日にかけて駐輪機器リニューアル工事を実施した。少しでも多くのお客様にご利用いただけるようにと自転車の台数を増設



リニューアルされた代田橋バイク自転車駐輪場

し、収容台数160台からバイクと合わせて164台停められるようになりました。地域になくってはならない、区民の皆様に親しまれる駐輪場を目指していきます。

荻窪駅西口バイク駐輪場

「荻窪駅西口バイク駐輪場」を2017年9月にバイク駐輪場リニューアル工事を実施した。バイクの収容台数も19台から20台に増設。荻窪駅西口周辺はバイク駐輪場が少なく、すぐに満車になってしまうこともありますが、リニューアルした事により、以前より横幅を気にする事なく駐車が出来るようになりました。利便性と安心してご利用いただけるようになりました。設計施工はいずれもアマノ株式会社(小林)

■ 日本の駐輪場事情①

行政は自転車の放置にかなり神経を使っている。その証拠に主要駅にはかなり立派な駐輪場が設置されている。またレンタサイクルの表示も目立つようになってきた。今回、福

島駅新幹線を降りると2500台(管理人談話)駐輪が出来る屋根付きの立派な無料の施設がある。列車通学、通勤の人々のために設置した満車の状態である。また15台ほどの無料レンタサイクルもあった。(4月22日)



利用は2度目という青年①

博多駅前の駐輪場の職員に「メルチャリ」と言っても首を傾げるだけ、仕方なく駅前交番で聞くと警察官が丁寧に教えてくれた。南口から北口に移動、教えられた場所を探すが土地勘がなく、なかなか見つからない、やっと見つけたホテル裏のポート。赤い新しい自転車(写真⑤)が目に入ってきた。

今年に入ってから話題をさらったシェアサイクルのメルカリ。今年に入ってから福岡で開始。早速、展開されたメルチャリに博多駅で試乗してみた。

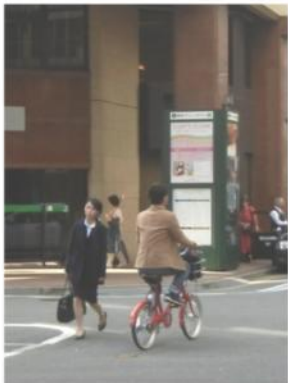
★シェアサイクル見聞★

ではかなりの時間がかかるのではないだろうか？運営はメルカリの子会社とのこと。中国ではあつという間にシェアサイクルが普及したそう。今、中国から多くの観光客が来博、彼らにとっては手慣れたものかもしれない。

オリンピックを目指して東京はドコモ・バイクシェアが都心10区と横浜初め仙台、大阪、奈良、沖縄など8地域と連携し着々とシェアを広げている。

自転車の所有からシェアへの流れは自動車から自転車への流れと共にますます加速するだろう。我が法人でも電動自転車や杉並区東高円寺でレンタサイクルとして提供し“ちよつと用足しに”という区民に支持され好評である。

今後、環境問題の観点からもシェアサイクルの動向は目が離せなくなってきた。



自転車でアメリカ西部を走る ⑨ 出水 豊

2000年6月13日、サンフランシスコの市庁舎正面玄関の階段には、長野県辰野町出身の田中誠一さんがアメリカ人男女30人を従えて待ち構えていた。彼はシスコで和太鼓の道場を開いていて、滞在中にカラオケで知り合ったのだが、私がソルトレーク市まで自転車で走ることを知って見送りに来た。



長い道のりはクロスバイクが走り良かった

大きな太鼓を10個も並べて田中さんはお弟子さんたちと勇壮な音を響かせる。周囲を大勢の市民が取り巻き、テレビ、新聞が10社以上も取材に来て、面映しかった。

ところがカリフォルニア州側からやっとの思いでシエラネヴァダ山脈をキャノンディールのクロスバイクで越えてネバダ州側へ下ると、風景は緑豊かな果樹園から一変して砂漠の中の本道。ガラガラヘビなど野獣の住み家である。夜行性動物が多いので夜は伴走車のプリウス

の中で寝て、朝5時に起きて走り続ける。40度を超す暑さなので、正午までには次の目的地まで着かなければならない。5、6時間の走りでのどが渇き、プリウスに積んだ1ガロン入りのポリタンクは空になる。運転している息子が近くの町まで走れば補給できるが、私が心配で離れられない。

ある日珍しく一軒家を見つけたので水をもらおうと近づいたら、中からひげもじやの男がライフルを手に出て来て「近寄るな」と叫んだ。なるほど、日本とは全く違うこうした環境での生活では、銃規制は厳しいと悟った。

自転車で走っていると、こうした細かい経験ができる。ネバダ州を駆け抜けて、目的地ソルトレークがあるユタ州に入った時もそうだった。幅30mほどの一本道が州境になっている。もちろん検問所などは無いが、この道路が天国と地獄の境い目だ。ネバダ州では酒もギャンブルもOK。大概のモーテルの1階にはスロットマシンなどがずらっと並んでいて、市民たちはパドワイザーを片手に楽しんでいる。ところがユタ州は酒もギャンブルも厳禁。レストランで注文すると出てくるのはアルコール分がゼロの馬の小便のようなルートビアだ。

ユタ州の青年が教えてくれた。州境を越えてネバダへ飲んだり遊んだりに行くのだと。そうして小路に連れて行った。並木の陰に青い小さな看板があり、入るとジンやウキスキーがたくさん並んでいる。パスポートを見せると外国人には売ってくれた。まるで禁酒法時代だ。もちろん青年にも1本買ってあげた。観光は自転車に限る。(つづく)

法人事務局の新体制！！



須藤照夫、吉田忠史氏は3月31日退社し新しく山崎幹夫氏が入社いたしました。なお新年度の事務局体制は総務・岩下隆子。企画運営・山崎幹夫。管理運営・平尾則人、小林清輝が担当。社員総勢35名（パート勤務、シルバー人材センター派遣社員を含む）と会員55名の90人を束ねて渡辺昭男（事務局長兼副理事長 写真）が引き続き事務局を統轄いたします。（渡辺）



山崎幹夫氏略歴 1977（昭和52）年横浜市役所入庁。主に教育、交通、企画総務を担い鶴見区長として市民サービスにも努めてきた。その後、横浜交通開発株式会社常務取締役、（財）横浜市交通局協力会理事長を務め今日に至る。

事務局だより

私の自転車ものがたり（2）

自転車には、ほろ苦い思い出がある。高校入学のお祝いに叔父が自転車をプレゼントしてくれた。ところがその大切な自転車を私は売り払ってしまったのである。それはこうだ。東京教育大学を卒業し赴任したばかりの国語の教師から「東京に素晴らしい先生がいるから会いに行こう」と誘われた。忘れられない昭和31年11月5日。「旅費がありません」というその教師は「君、通学用の自転車あるだろう。あれを売ればいいじゃないか」と。どうして売る気になったかは定かではないが、とにかく売り払って東京について行ったのである。お目当ての先生とは「戸田城聖」と知ったのが5日。初めての出会いだった。その風貌とべらめい調の話術に魅了、人との出会いは不思議なものだと「自転車」と耳にする度に思い出す。（川元 一）

